



UNITED NATIONS
UNIVERSITY

UNU-IAS

Institute for the Advanced Study
of Sustainability

文部科学省拠出
国連大学助成事業
地球規模課題解決に資する国際協力プログラム (GGS)
第一期 (2015-2017)

GGS 最終報告会における審査委員会からの講評

広島大学

《開発途上国における学び改善のための包摂的教育システムモデル構築事業》

【妥当性】

- 国際的な教育連携パートナーを活用し、現地の状況に応じた有効な教育実証を進めることができおり、今後の展開につながる土台が構築できた。
- 全体のプログラムが丁寧に構築されており、どの部分を GGS で対応するかが明確であったため、他のプログラムと上手く連携ができていた。
- SDG4 に直結する課題を各国の実情に合わせて取り扱い、多様な課題、多様なカウンターパートに対して多大な努力を払い、有用な成果を挙げた。

【有効性】

- SDG4 を視野に入れた有効な目標を設定しており、研究対象ではなくパートナーとしての協働的な実践が達成されている。
- ローカライズにはまだ時間がかかりそうだが、異なる実施国においてもボトムアップ的な取り組みが包摂的学習改善には有効であったため、良い知見が得られた。
- 課題の中核となる関係者が主体的に参画し、成果を挙げる仕組みがモデルとして複数創出されており、対話・共有の重視が有効であったと思われる。
- 本プロジェクトは、ステークホルダー、行政の関与、現地側の研究者、スタンバイする日本側研究者のネットワークにより実施されたため、現地の問題解決に日本側が答えを出すのではなく、外から刺激を与え、関係者らが協働して取り組むという関係構築が有効であった。

【効率性】

- それぞれの国での実践的な成果が、ローカル化（自立化）され水平展開につながっているが、それを俯瞰するための必要な期間・投資の類型化ができていないのが不明瞭と言える。
- 地元大学がこの教育システムを理解しアップグレードしていくと、包摂的学習改善システムがフィードバック的に改善されていくというフレーミングが良くできている。
- 従来 of 長年にわたる協力関係に基づき本プロジェクトを実施しており、その費用効率性は高いが、今回のプロジェクトでカウンターパートに選ばれた大学は意欲的な機関に限られているように見受けられる。

【インパクト】

- 2030年を目標に、日本から「学びの改善」として提案できる可能性があるため、マニュアル化等を通じた国際発信が重要と言える。
- 将来的に得られるSDG1へのつながりが見えにくいなど、SDG全体（inter-linkage）の観点から見れば改善の余地はある。例としてSDG8のDecent Workへの関わりがあるが、SDG4の教育歴が整わなければSDG8につながらないため、SDG4をコアにしてSDG8にコンビネーションしていくというポジティブなサイクルを作ることが期待できる一方、教育活動が促進されれば電力消費というネガティブな影響も考えられるため、現地の計画に配慮した働きかけが必要であろう。
- 各国の事例に参加する複数国で共有し学び合う仕組みが機能し、具体的な教育行動の展開・高度化にはつながっているが、その成果をエビデンスに基づき客観化することができればより望ましい。
- それぞれの国に対して、教育を軸とした成長像を提供することができれば望ましい。

【持続性】

- システムの統括が重要で、1) ネットワークの強化、2) 国際標準化、3) ESG等資金導入の検討も必要となるのではないかと考える。
- 自立にはまだ時間を要するが、実施国内における大学側の人材を継続的に育成していくことで、将来的な自立につながると考える。
- 今後も継続的なフォローアップが必要であり、今回のプロジェクトの実施によって、持続性が担保されているわけではないが大きな成果は上がっている。
- 当初から成果の持続化についての押さえ所を仮説的に持ちつつ実証していったことで、事業期間後の取組みの素地作りにつながっている。
- 国際セミナーの実施等、実践的な経験値を一般化するプロセスは教育学を越えて重要な知見と思われる。